

俳諧古今鈔

一

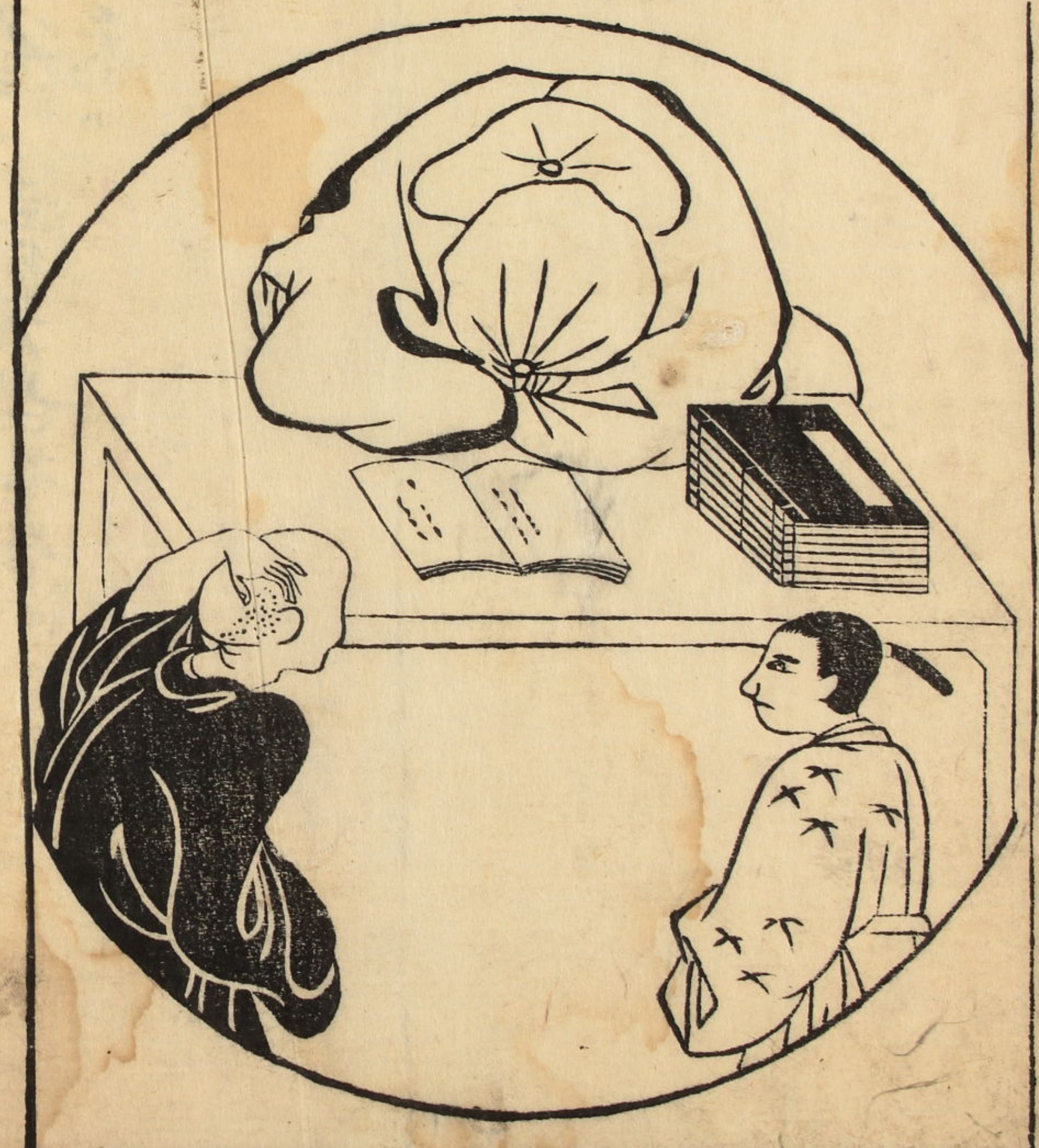


10/15/11

天
宮
之
寶
鏡



家類圖



他諸古今抄巻之上

物志序

運二序

今以他諸古今抄巻之上
 一 漢之司馬遷之中記
 一 滑秘首也子と記 孔所の六秘に名とありて
 一 訓諫の一道と傳く 一 素限の諱名もいふ名と
 稱して滑秘首いふは能諧のこゝとて 一 中疑一決
 の中又あるより傳仰を花のらもていふれて 諷美
 と家の秘法いふもさうさうなれとせぬもいふ
 一 一とていふ一とていふの向民とていふれんは 諷歌

一 三テ用オハ其人ノ不自在トハ今式ニ人ヲ弘明セス抄ハ
 古凡ノ偏屈ヲ山明トナリ或ハ先師ノ再撰トナシ
 如是トハ弘經ノ如是我聞ニ後ニ再撰ノ折言語ナリ
 一 此抄ニ證句ヲ舉ルニ系ヲ定テ各乗ナキハ總テ祖翁
 ノ證句ナリ系ヲ定メスハ此印ヲ書テ直ニ送書ナリ
 多ク先師ノ證句ナリ但シ別人ハ句下ニ其名アリ
 一 此抄ニ里園ノ印ハ總テ文法ト句格ナリ然レテ文字
 ノ傍ニ隔テ白園ノ印ハ或ハ切字ノ節目ト知ヘク
 或ハ對語ノ相致ト知ヘク或ハ段ノ要文ト知ヘシ
 一 此抄ニ古式トハ多ク連系ノ兩式ヲ指シ古抄トハ貞徳ノ

佛拿ヨリ埋木噓州ノ類トト一部ニ埋木ノ名ヲ指
 カル師資ノ辭讓ヲ家ホスヘキナリ或ハ稀ニ本式ト
 云ルハ今ノ負方子式ノ本文ヲ指テナリ
 一 此抄ニ異名異躰トハ或ハ牡丹ヲ汝見草トハ異名
 ナリ牡丹詳トハ異躰ナリ或ハ音訓ノ差別トハ自雲
 ラシラケモト云フモ各異ニシテ躰ハ同シ此故ニ異名
 一 下云ク異躰トト云ル今式ト古抄ノ透同ト箇條
 ノ古法ト下ニ悉知スヘシ

再撰^ニ貞享^ス式^ヲ序^ラ 並目録

東老坊

貞享此^レしう^一け^一式^一目^一と^中右^レの^記譜^と今^レ此^レ能^レ譜
 こと^も如^レの^記譜^の事^もひ^ひある^{こと}なり^と白^馬の^記譜^に
 と^もなり^て始^と七^又條^{より}ひ^らの^後に^はき^き十九^條
 こと^もなり^てお^し十九^條と^今此^レ式^一目^一也^はら^のい^らん^事
 の^戊辰^{より}え^福の^祭酒^{なり}と^して^もの^間に^は撰^ぶれ^ば
 能^レ譜^の時^代と^もし^てい^ふる^も貞^享式^と題^と
 い^は後^にい^ふ人^の稱^名ち^りせ^たと^して^一部^の後
 と^もなり^てお^し老人^の傳^言と^して^いふ^るも^事に^は所^在

の^切本^とも^{なり}て^能言^連語^の所^在と^もし^て能^レ譜
 い^まも^も次^に左^の論^のより^て士^農工^商の^人と^して^い
 下^字と^達の^名と^いふ^{より}保^中此^レ所^となり^てい^ふ
 と^もし^て十九^條の^裁断^と能^レ譜^の字^論なり^て
 下^字と^達の^名と^いふ^{より}保^中此^レ所^となり^てい^ふ
 と^もし^て十九^條の^裁断^と能^レ譜^の字^論なり^て
 遠^には^しり^て花^の月^也あり^てひ^ひ指^する^も法^と同^名
 異^用の^説ある^もし^とも^{なり}て^古代^の名^同あり^て勿^論
 今^式の^書用^とし^ても^して^は我^門の^書流^{なり}
 此^レも^もな^りと^もなり^てい^ふる^もし^て書^の特^稿
 いか^にも^事辨^異の^案撰^して^或と^相款^の書^入

あり或らちて清されらるにあり申しても時人
よむらひて口授めらるにたれらるるに再撰
の場よりしておとねてはたれらるるに
新角のあやまりありんやまうとく竹符の中
あらんやと鬼園の冊よとほくおあめのこと地
達をたんと我々の備固あもやとて武路
の古内人よ議してけ式とをうへてはたれらるる
不とい書とりんや一巻一巻の事とてしと
右にたれらるるに他諸の公式かくの事とて
下はの事とてまひて遠くとも書の内秘とあり

近くとけ撰の形とありて他諸をけしては式の
論よりしてせは互備の文とやうけ訓練
詠笑の用ちりてありてかめことかくせ
しとてはるるに故書の撰記しててるに建
のこ地とてるれと也 洋器 洋物

寶永七 庚寅 十月十二日

...

貞享式目録

大段ハ本式ノ目録ナリ
小段ハ再撰ノ附録ナリ

- 一 俳諧と誹諧と字論也事
- 一 他諧と諷諫の道ある事
- 一 六義と今の和訓也事
- 一 又段句と切字とるるにあり事
 - 附 心切の事
 - 附 中切の事
 - 附 推切の事
- 一 切と之の差ふある事

- 附 二字切の事
- ニ字切の事
- 三段切の事
- ニ段切の事
- 一 心切と多々ある事
 - 附 とらうの事
 - 附 下らうの事
 - 附 大廻の事
 - 附 まおちの事
- 一 押字と抱字也事
 - 附 句讀切の事
 - 附 無名切の事
- 一 二とらう也事
 - 附 浮草の事

欽哉のり

一 小のちのり此事

附 ちのりのり 一。ちのりのり

らん。ちのりのり

一 百龍の表八句此事

附 發可しゆのり 照し影子のり

才よ手余波のり 可月の軽きり

一 四折の曲節此事

附 越而し句作のり

撰集のしゆのり

一 月花此事

一 指合と去嫌此事

一 意心句此事

一 季の節の踏くる物此事

附 二季の季三季四季のりり物

受の三季のりり去るのり

一 季とあるの類とある物此事

一 各取の類の發句此事

附 新、躰のり 四季格のり

詠諧奇のり

- 一 四季子の各類此事
- 一 他譜の殿各遣此事

惣合十九條

古今抄序目終

再撰貞享事

目之一

古今他譜序

芭蕉庵

此は我らの他譜を二十歳のじうと各ありて
 周泰の比より訓諫とあらは漢魏の向と終矣と
 いろむれん史記と孔門の詩書とをわたりて
 和漢の風雅の二をともをれりまらるるに中心は
 の誹謗と子と應安の新式とをとりて慶長
 の御筆といろまらりて拵合とまらりてまほと
 ともむらふと今とてれた世の公式とあらりて東漢の

不自在しつて一けぬし世式とひそくに机前の
三子と云ふて下世の御筆より嘯州の二子
と云ふまゝと云ふと控まると云ふがなり耳田の
公なるんらん取捨し一字の私あく今一や二種に
寛政より近く一世の寛政と寛政の遠く百世
の御筆より遠く今一天の冥合と云ふまゝや
と云ふて一知の授記と云ふは式めあといふ
は式の名より遠くいふる命

貞享五年戊辰孟春如言日

再撰貞享子式

○俳諧と誹諧と字論此事

むらり俳諧と誹諧とを和歌の家より字論
あれと誹子史記の素隠し滑稽肯獨俳諧と云
惟ちり誹文ありていふはなく此評林と誹諧の所
いかに下り出ると我おの中いへ延表の御代此
古今集よけしき誹諧の二子と云ふ和歌の二解
とあるとり拾遺集よけしき二子と用ゆん漢
同名の俳諧ちりや俳と別名の誹諧ちりや古今集

一畝假名をかきれいさるもまゝぬも今世にひらり
て誹謗ハイツイくしよと事れいしりーの風雅の如きと
ちりたりらささうハキハおろし解九ふり
一と能誹ハイツイ二と誹謗ハイツイ三と能誹ハイツイ四と滑稽言云
法輔の奥後おしるへて宗祇の言まうと誹ハ
南尾坊ミナオノと誹ハ朝音坊とあれハ他誹と誹謗を
ふるるも誹謗の非此有るもふんせもれは
より代くハ誹の字と用いさうハ是非坊シホノと
てなとあまふふふれハ代ハ對しハ穿鑿センサクを
へく原えれとるの秘訣といひハ所詮ハお承

まゝとこせつむせ

東巻云△再撰サキもらんけ誹をほさく人偏の
能字ハイツイしけし一京建まのま地とふれと
矯世憤俗キョウセフンソクとつるまをのまハ由當とけり
て他ハ元牙駁ゲンガハクをもくもくハ例ハ我々の
遜言ソンゴンちり也まうハハ論ロンり連まハ或詞
ハりとも誹謗の名まと坊城ハツシく今ハ能誹ハ
當用とえくハ同大異の故とまハハんはれ
アハくハ他誹の遊戯ユウキちりとまハハハハハ
誹謗の空上戯ちりとあそれハ中右の誹おの用

東巻

四

と申用にとりていふにやむ自問答の事
あつていふにやむ自問答の事
あつていふにやむ自問答の事

○他語と訓諫の道あり事

天地とてにけりもて後天なるあり地なるありと道
よふ所てけりもて人なるもてけりもてけりもて人向
の私よりするに物の中よりあつて善なるもて
悪なるもあつてと釈迦とて悪くもさるるも来來と
とてけりもてけりもてけりもてけりもてけりもてけりも

けりもてけりもてけりもてけりもてけりもてけりも
るもてけりもてけりもてけりもてけりもてけりも
の以難とありもてけりもてけりもてけりもてけりも
中より他語の二なるもてけりもてけりもてけりも
用夫も此むもてけりもてけりもてけりもてけりも
もてけりもてけりもてけりもてけりもてけりも
るありてはありとありもてけりもてけりもてけりも
道なるもてけりもてけりもてけりもてけりもてけりも
とやうけりもてけりもてけりもてけりもてけりも
法とありて世にありもてけりもてけりもてけりも

諷諫し諫めし備初者一楚詞の諷めらるるや
ていふいふとあれせはと又倫の和と本
君父の善ととていふは婦弟の悪と
善と善と一悪と悪と一直言と
まれのいふ時人の機嫌と
大なるいふやとれとむいふ
あつとあつといふとめれ
儒仲の二言一感は動き
日にあつと一殿討のこ
悪とあつと比干の腹と
とていふは

とていふは
い十方偏照の光ぬと
とあつとあつと人
いぬ一楚の子西と
諫めより楚正王の
とていふ一儒仲の
とていふ一最上
儒家も仰り
うあつと
親せよと
古今抄卷

りて戯れ少くはれ直諫する人此をせつて古今
に悉人の司りてふとらまらんふれは能治の
る子と治國齊家の一助として臣とては
又倫とやうきんは儒師の大人とていふも知
べきとてましくは諷諫ありて一者には人の心
琴と正諫の明節明節不可久安也故
諷諫の取容とては世習に諷諫の科とては
世文と諷諫の節とては諷諫の節とては
くといへしはとて今も能治せしにありては
まことやをいれよ高き遠の風よあつて敏捷の知

はのりてたては相に州のそとまじし言の下は着破
し歌人連音に揖讓とあつてまじしと建門の
まじしと虚名のみまじしとまじしとまじしと
能和人和とありてまじしと能人の合衆とては
原壤と夷此此言に類回ら樂此其詞と一分八間
のまじしとまじしとまじしと百人の衆とては
一戸は此岸とありてまじしとまじしと此の岸が
まじしとまじしとまじしとまじしとまじしと
まじしとまじしとまじしとまじしとまじしと
まじしとまじしとまじしとまじしとまじしと
まじしとまじしとまじしとまじしとまじしと

わらねまを詭譎のつらきも五七此句法と言語の
ありいふて例の詭譎のつらき公道とあり例此
詭譎のつらき公道とあり一とあり一然否の違ふ
不し一と或目と世く此衆議よりありある也

東老を云い一語の要文と信仙ののち此汗王遠を
詭譎のつらき人此高麗を詭譎して詭譎のつらき
世にの随一とありつらきことと違ふのきと地と
つらき下学と違ふの用とつらき文章此虚のつらき
つらき詭譎のつらき一とありつらきつらきのつらき
孟子の虚詭のつらきつらきつらきつらきつらきつらき
天道

のつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき
虚のつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき
詭譎のつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき

高麗のつらき

○六義我々今の和訓此事

つらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき
我々つらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき
つらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき
各目つらきつらきつらきつらきつらきつらきつらきつらき

ちるの詩の所義此所法ありて其もこれと
 六美の後の和漢とに分別ありて其もこれと
 古語もこれと六經とに分別ありて其もこれと
 ことりつるごとくも此の六美と書かざれば
 此の中にも賦比興の各々の訓とに別あり
 てその和音とありて其の連音とに別あり
 の的ありて其の音や音此所法ありて其も
 此所法と此所法とありて其の今按ると其の
 差ふると凡所法の之種とに別ありて其の
 同唯し哀楽とて其のありて其の王侯士民の心

とりつるごとく賦比興の之緯とに眼界の景作物と訓詁
 して論語と文所法とありて其の力とて其の熟竹木の
 各とありて其の力とて其の力とて其の力とて其の力と
 の凡所法とて其の力とて其の力とて其の力とて其の力と
 い王を此のありて其の力とて其の力とて其の力とて其の力と
 ちりて其の力とて其の力とて其の力とて其の力とて其の力と
 二用とて其の力とて其の力とて其の力とて其の力とて其の力と
 とありて其の力とて其の力とて其の力とて其の力とて其の力と
 六經と其の力とて其の力とて其の力とて其の力とて其の力と
 此の力とて其の力とて其の力とて其の力とて其の力と

中ありて先と我所の實證しるる所

風

訓義我凡ハ訛諭ナリ多クハ言ト訓スレ和歌ニ
ハ歌ト訓スレト比與ニ賦ニ給ハレ毛詩曰風者
多出於里巷歌謡之作男女相與詠歌各謂
其情周南召南親被文王之化ニ言倫為風詩
之正經云然ハ其国其人ノ風俗ノ善惡ハ風謡ニ
依副テ多クハ故ニ風化トモ註セシナリ○今按ルニ
風化モ風俗モ總テ詩歌ノ訛諫ニテ上所化曰風
下所習曰俗トモ上ハ風化下下ハ風刺上トモ云リ
何レモ時代ノ風謡ニテ録倉人代ニ言蒲蒲ノ謡ヲ作りテ

雅

其代ノ俗樂ヲ刺レ類ナリ○獨按スルニ我家ノ訓
美ニ風諭ノ二字ノ意ヲ連ヒテ諭言凡訓スキヤ
然ラハ俳諧ノ宗ト成セ凡諷諫ノ和モ叶フヤシカ
去尾凡名ノ太騷トハ此等ハ百世ノ明監ヲ待ヘシ
訓美ニ雅ハ正ナリ直ナリ多クハ正言ト訓スレ和歌
ニ直言歌ト訓スレト平話ノ徒言ニ給レ又ハ
傳語ハ音訓ノ響音ヲ憚ルヘシ○今按スルニ風雅ニ賦
ハ漢土ニ詩經ノ所成ニシテ凡ハ虛ヲ以テ天ニ起リ雅
ハ宮ヲ以テ地ニ止ル詩經ハ此ニ美ニ濫觴ニテ乾坤ノ
二美ト成レリ故ニ我家ニハ風雅ヲ虛實ノ二用

古今抄卷三

三

ト見テ凡之懲惡ノ虚ヲ用イ雅ニ勸善ノ為テ用
 六雅ニ正直ノ意ヲ汲テオホキヤ公言臣訓スキヤ此等
 ハ異名同躰ノ例ニテ一世ノ實議ニ據ヘテ
 訓美ニ頌ハ称ナリ義ナリ愛ニ祝言下訓スレ和歌
 ニモ祝言下訓レテ引歌モ節ル所ナレ然レ詩序
 ニ雅頌ハ躰ノ様トト雅ハ国家ノ諷諫ヲ含ヒ
 頌ニ君父ノ壽量ヲ祝レテ神ニ告ル意ハ勿論ニヤ
 此故ニ六美ノ引歌モ頌ノ躰ノ明ニテ且外互各
 ハ節ハレ○今按スルニ毛詩ニモ雅頌ニ備朝廷郊廟
 樂歌之詞其詔和而莊其美寬而密正

頌

之於雅以大ニ其規和之於頌以要其止也
 詩之大旨也然レ六雅頌ノ二用スル外ハ在密ノ
 次ヲ備テ諷諫ノ正直ヲ行ヘソ内ハ和實ノ情
 ヲ含ヒテ詩ノ優美ヲ調ヘシ爰ヲ孔子ノ言
 給ル文王ノ文ニレテ孔子ヲ我家ノ太祖ト成荒自馬ノ
 和節モ此謂ナリ之經ハ例ノ温厲ヲ知ヘキナリ
 訓美ニ賦ハ鋪ナリ量ナリ爰ハ義言下訓スレ和歌
 ニモ美歌トアリ又選ノ本ヲ註ニモ義事明白也
 ト云ハ眼前ノ物ヲ美並テ直地ニ安情ヲ演ル
 謂ナリ定家卿ノ釈文ニモ賦ハ歌人ノ本意ナリトハ

賦

東抄卷

三

四季子二月雪ノ妻相ヲ詠シ花鳥ノ優游ヲ知レト
ナリ賦ハ賦ニ文章ノ惣名ナリ

比

訓美ニ比ハ比喻ナリ爰ニ准^{トラス}言ト訓又ヘシ和歌ニモ
准歌トナリ後ニ托物比魚トハ詩人歌人ノ優情
ヲ托ヘテ身ニモ木ニモ物ヲ言ハス類ナリ或ハ韻書ニモ
比ニ子ヲ魚ニ比^{ハカ}於物^ヲ魚^ハ托^ス事^ヲ於物^ニ
云ヘリ○今按スルニ比ト魚トハ娯情ニ先後ノ心得アリ
比ハ物ヲ取テ其娯ニ准テハ魚ハ物ニ托テ其情ヲ起ス
物ヲ催スト物ニ催スト自他ノ差別ヲ知ナリ此等ヲ
他語ノ微中氏解物^ニ云キナリ

興

訓美ニ魚ハ誘引ノ美ナリ爰ニ誘^カ言ト訓セシ和歌
ニ喻^カ言ト訓レヌト凡比ノニ訓ニ然レ然レハ魚ノ字
ト凡字ノ和訓ハ美ノ中ノ太騷ニテ我内ノ象義ハ
知是トト百世ノ明證ヲ堪キナリ○今按スルニ魚ノ
一美ハ和歌トモニ合明ナラヌヤ去ル論語ノ陽貨篇
ニ子路ニ詩經ノ汎流ヲ勸テ詩^ハ可興^ハトハ四季
ノ月雪花鳥ニ誘^カテ優游ノ情ヲ興^セトノ
謂ナリ然レテ例ノ未註ハ發起志氣トノ
云捨レハ孔子ノ宜給^フ似而非^ル物ニヤ興ハ
決シテ遊魚ノ魚ト註スレシ詩者人心之感

物ニ而形於言ニ之餘也トハ朱氏ノ詩序ニ云
十カウ何故ニ自語相違セルヤ此等ハ教誡ヲ先ニテ
文章ヲ後ニセシ論語一部ノ取違ニテ先後例ノ
察スヘキナリ然レハ真ノ美ヲ以テ詩歌ノ大本ト

知キナリ

○發句ノ切字ノ方々理ある事

むしり切字のりや十八字の事ありて和歌に連歌
しと此は法あれし例の所ありしと云ふとあれ
いふし知の心種と云ふしりやうりて自ら分る

いふしりや
十八字の事ありて
和歌に連歌
しと此は法あれし
例の所ありしと云
ふとあれいふし知
の心種と云ふしり
やうりて自ら分る

るありしやと云ふしりや切字のりや十八字の事ありて和歌に連歌
しと此は法あれし例の所ありしと云ふとあれいふし知の心種と云ふ
しりやうりて自ら分る

此れと初定と云ふ
るありしやと云ふ
しりや切字のりや
十八字の事ありて
和歌に連歌しと
此は法あれし例
の所ありしと云
ふとあれいふし
知の心種と云ふ
しりやうりて自
ら分る

関二 中切

猫の意やい四五国の
みゆら日

女猫のまじり
四五国の月
を注ぎて
の七文字中
とせし
切し

家談と申すのハ一況やサレ所着の解にハ詞
みさねとてつうさ言ふてゆまの入をさ言
しあるをわると道の自信自視あうと世の義
と意しや自よる理と後うと理をたれ不
の物あはしあらうとある性うて感作を
一信の一字あて

中切 猫の意やい四五の勝月

やいしとせし。まよ月の中

はれけ切にあはしやい。所へちん。信しとた
ら説とあはしやい切。あはしと切と可し節

関二 自他切

人よはるハ
おハと
自他切
中切
体

ちりと句扱めおとまらしとてのハ中とて
こくりちるハ中切とてお合と和歌し
句讀ありハ講師の人せかひとちん有徳の人
すしとて

捨扱切 世と旅とあめりく田のちん

人よと世と買とて知とを

け切と全く新制ありとてあはしとて
自他の捨扱ありとてをたれとて
し物と對とて差ふと捨扱とては
あとりハ今扱とて右せと合と和音運歌のん

へ汲あうり各目らりり新制なれに近く一世
 の會談とを欲しき世のの管とすん
 東老云△再撰まらんけいんも切んるの
 むれとしもあうずいそちもかも利し心切
 らうあをるめあれずらんいらんれは根も根
 のわけあされしうらういんりきんよの
 むのしん同とが辞ん世常用建と親
 まらん人におりいああめ方とをぬてきて今
 飛んまいまいあひんしん中れ七のしに
 んとあくらんらん下版のあうらん自らの

舞向と代又とあけらま舞のついかしと怪
 とれい誦人顧我とつ例のあ生とああん
 やいそららあとの世向と業もらん

幸崎のねんせいり勝ん

け向と互絶の二まうり下色首山の秘授り
 んとゆきく哉のあまとあれりん
 むされいむあうら例のあう下版の
 の句絶しんと下版のあうあひん
 んれいああをのあ言とあうり
 減後の用撰あれはあうあああああ

と高き弱とてこれや笑つむし湯名物の名お
とどくせらるやけ格となし新制なれん愛評
へ角のつらふもや或は給の題とつらひ給ふ
伊勢のよきとてかたさくられつらたれと
あられとてあらぬとて伊とてと敵討と
これとて再撰の神句をねおし十口と
或はと連音し七瀬階とし七瀬ゆとてあり
西家の神句の書いぬあれしと論とねと七瀬北
るわなあり。今梅まらた連音とて又用市の神
句とあがりて伊勢の書いぬあれしと七瀬ゆと
てあり

神書の中句とあがりて七瀬ゆとてあり
いさく又用市と神書の神句ありりや切字は
入ふあまの句ありとて七瀬ゆとてあり
へ測のこふちりてしとてあり
二段の
梅の書来はりこのあむとてあり
前巻とて武家の書来とて七瀬ゆとてあり
け句の終まるあをといふと七瀬ゆとてあり
よふとてぬくさくらりて七瀬ゆとてあり
これとて七瀬の地とてあり

いふにわて千六の歳と傳ふるより字名は多岐
しほふとあけなしくはむれをなるといふ
はいつしやうとて再撰の場へいしてあは
一巻の刷新とありて裁字より二つ名のなとを
耶字より四品の名を拾へてふか月名の説と
もあはれぬ多きをいふにむしうとてお祇の
かすれつひ給世の五百七條とるるし仰座北
百千一億といふと一宗くよちほはるし字名も
各あはれぬとていふとて神子自傳の談笑訓
しありけの伝説あはれとあはれてし御のあはれ

いけ或月の増減あんならとていふにわの推詞
とて言ふと昔の御命あはれとていふにわの推詞
あるとていふとて遺稿の大任とていふにわの推詞
例の實録よりいふにわ
桐のまゆ。新編ちり塚の
みま。神のまゆ。むしとていふにわの推詞
これに新編のまゆとて田舎の御家とていふにわの推詞
とていふにわのまゆとていふにわの推詞
ありとていふにわのまゆとていふにわの推詞
とていふにわのまゆとていふにわの推詞

